心肺蘇生法に神様は必要か？

「何故、『この世界に』と言い切れる？」

　妖精モドキの発言に、俺が真っ先に尋ねたことはそれだった。

「他の世界に、とは考えられないのか？　さっきの話からすると、神様を同じ場所に置いておくのはまずいんだろう？」

　俺なら、別々の世界に置いておく。そう思ったのだが、どうやらちゃんと理由があるらしい。妖精モドキは、首を横に振っていた。

「タンタロスの目的は、八人の神への復讐です。別に、神の力を弱めることが目的というわけではないんですよ」

「いや復讐なら、神様の力を弱めてた方がしやすいんじゃないのか？」

「ああ、言い忘れていましたね」

　妖精モドキは、少し言いにくそうな顔を作り、俺から視線をずらす。そして躊躇いがちに、話しだした。

「そもそもタンタロスがフルパワーなら、八人の神全員が全力を出したところで勝てやしないんですよ」

「……はい？」

　ならば、どうやってタルタロスに幽閉したのか。そんな疑問が頭に浮かんだが、その疑問を口に出す前に、妖精モドキがすぐに答えを言ってくれた。

「やつをタルタロスに送り込めたのは……まあ、こちらも寝ているところを奇襲しましたからね」

「あー……つまり今回の奇襲は、お前等がやったことと同じことをされたわけね」

　俺のその言葉に、ムグッと言葉を詰まらせる妖精モドキ。

　まあそりゃ当然だと思う一方、少し可哀想な気もしなくもないので、こいつの言葉を待つことなく俺は続けて口を動かす。

「で、タンタロスがフルパワーだと、八人の神様より強いってのは理解した。だから、一箇所に纏めておくことにも、特に問題は無いってのもな。だが……それならそれで、あいつのいる宮殿の地下牢にでも閉じ込めておけばいいじゃないか。わざわざこっちの世界に連れてくる意味なんて――」

「いえ、それはタンタロスが『フルパワーなら』の話でしょう？　今のタンタロスは、長年タルタロスに閉じ込めれていたせいで本来の力は出せないんですよね。だから力が戻るまでは、極力自分の近くには神は置きたがらないと思いますよ？　万が一反撃されれば、タンタロスにとっても困るでしょうしね」

　俺の話に割り込む形で妖精モドキは否定する。

「それに、幽閉だけが目的なわけないじゃないですか。言ったでしょう？　目的は八人の神への復讐だって」

「……ああ、そういうことね」

　俺はその言葉で、妖精モドキの言いたいことを理解する。

　要は、捕らえた七人の神様は、残り一人の神様を誘き出す餌、つまり人質として使われるのだろう。だから、その『人質』をこちらに見つけやすくするために、わざわざ同じ世界に置いている、というわけか。

「そう。あくまでも奴の目的は復讐。なら、最後の一人を捕まえるまで、他の七人の神を殺すことは無いと見て間違いないでしょうね。こう言っては難ですが、その最後の一人が瞬様に『自魂蘇生術』を使ってくれたのはラッキーでした。お陰で、私達の知らないところで捕まってしまう可能性が無くなりましたし」

　途端、俺の胸が内側から蹴り上げられる感触が襲ってくる。だから頼むから、俺に攻撃するのは本当にやめてほしい。気持ちは分からんでもないけどさ。

「とは言え……一体どこに閉じ込めているんだ？　地球は広いぞ。冥府と比較するとどうかは知らんけど」

　七人の神様が生きているのは何となく分かったが、それにしたってどうやって探せばいいのか、俺には検討もつかないことだ。

　それは妖精モドキもずっと考えていることのようで、それでも俺と違って隠し場所には心当たりがあるらしい。まだ考えを纏めている最中のせいか、俺にいくつか質問をしてくるが、それに答えていく度に、少しずつ確信を持った顔になっていくのが分かる。

　しかしここまで妖精モドキを見ていて分かったのだが、こいつは致命的……という程では無いものの、それでもポーカーフェイスは下手なようだ。考えていることが、ある程度顔に出てくれるせいか、こっちとしては話の結論や道筋が予想しやすくて助かる。

　そして、結論が出たようで、一人でウンウンと頷き納得している。

　分かったのはいいが、それを早くこっちに教えて貰いたいものだ。

　その念が通じたのか、妖精モドキはハッとしたように俺の方を見て、慌てて口を開いた。

「えっと、まだ完璧に分かったわけじゃありませんが……きっと七人の神は、誰かが常に持ち歩いているのではないかと思います」

「……は？」

　そんな間抜けな声を出した俺を責めることの出来る奴がいたら、即刻その面を拝ませて欲しい。

そう思った程、俺はこいつの言ったことが理解できなかった。